

## 第2章 宇部（小串構内）医学部浄化槽新営に伴う発掘調査

### 1 調査の経過

調査地区は医学部および附属病院棟とは北西-南東を走る市道を隔てた大学キャンパスの東端部に位置する。昭和58年度に旧石器時代後期のナイフ形石器、削器および古墳時代の須恵器、室町時代の土師器、瓦質土器が出土した体育館新営に伴う調査地域に極めて近接<sup>1)</sup>しており、小串地区において当該地域一帯は施設整備等と併行して比較的早い段階から資料が蓄積されつつある地域のひとつである。

今年度に至って、体育館新営に伴い予定地内に存在する課外活動棟付随の既設の浄化槽が解体・撤去され同建物の南側に新設されることとなった。これをうけて、新営予定地約32㎡について昭和59年5月1日から9日まで発掘調査を実施した（A区）。また、新営体育館付随の浄化槽もあわせて新設されることになり、工事および調査日程の調整を経て同年8月1日から7日にかけて発掘調査を実施した。調査は人文学部考古学研究室の協力を得て新営予定地約12㎡について行なった（B区）。

その結果、両区とも湧水および安全面での観点から調査が制約されたが、A区では中世から近世の木製杭が多数検出されたほか、二次堆積層から瓦質土器、国産陶磁器が出土した。また、B区では近代から現代の溝1条を検出し、A区同様二次堆積層から土師器、瓦質土器が出土した。

なお、腐触土、構内造成時等の置土を含む表土は機械を使用して除去し、以下は人力による分層発掘を行なった。

（河村）

〔注〕

- 1) 山口大学埋蔵文化財資料館「宇部（小串構内）医学部体育館新営に伴う試掘調査」、『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅲ』、1985年）。

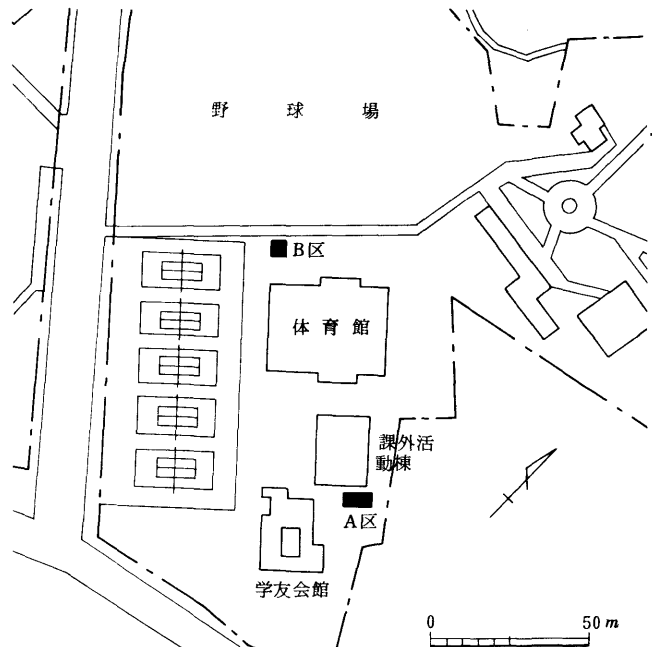


Fig. 1 調査区位置図

宇部（小串構内）医学部浄化槽新営に伴う発掘調査

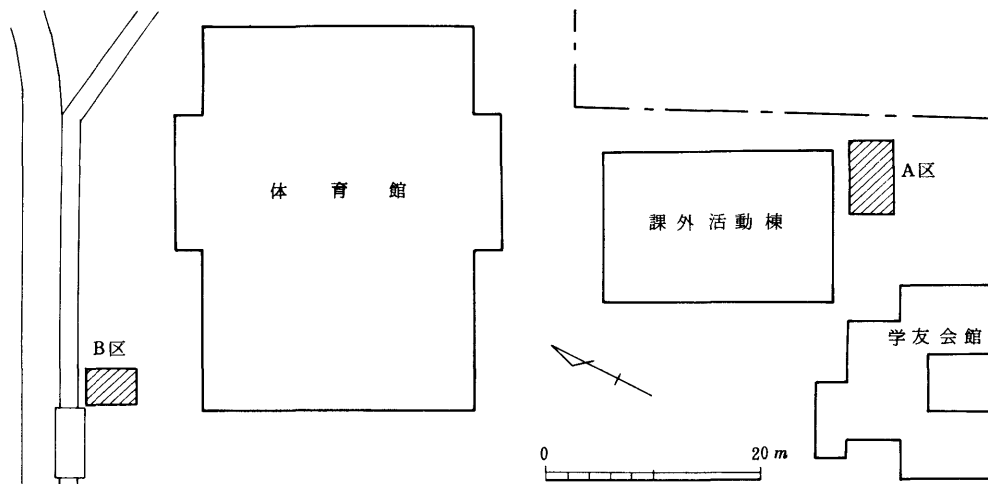


Fig. 2 調査区設定図

## 2 位置と環境

医学部キャンパスは、宇部市大字小串1144に所在する。小串周辺地域には、遺跡が散在しており、以前から大学敷地内にも遺跡が存在するのではないかと推測されていたが、未確認の状態であった。昭和58年度にキャンパスの東端部に体育館が新営されることとなり<sup>1)</sup>試掘調査を実施した。その結果、顕著な遺構は検出されなかったものの、旧石器時代のナイフ形石器、削器、細石核、剝片、古墳時代の須恵器、室町時代の土師器、瓦質土器が出土し、遺跡として周知されるに至った。

宇部市は、山口県の南西部に位置し、大別すると中・北部の丘陵地帯、台地の発達する周防灘沿岸地域、厚東川河口付近から成る。

中・北部は、長門丘陵<sup>2)</sup>の一部で、標高100m前後の小丘陵が連なる。発達した浸食平坦面から成り、老年山地の特色をよく表している。一方沿岸地域は、洪積世の中期から後期にかけて地盤が隆起し、海面が変動したため海成段丘が発達している。この付近は宇部台地と呼ばれ、背後の丘陵から流れる河川に浸食され、幅広い浸食谷や谷底平野がみられる。西部の厚東川河口付近は、ほとんどが元禄時代以降に人為的につくられた平野である。

宇部市域は、山口県内でも遺跡の多い地域の一つである。以下では宇部市域の歴史的変遷を遺跡<sup>3)</sup>によってみて行くことにする。

旧石器時代の遺跡は宇部台地に集中する<sup>4)</sup>。特に東部の沢波川、浜田川流域には、後期の遺跡である南方遺跡、長樹遺跡<sup>5)</sup>、本郷遺跡等が分布し、ナイフ形石器、台形石器、細石刃、

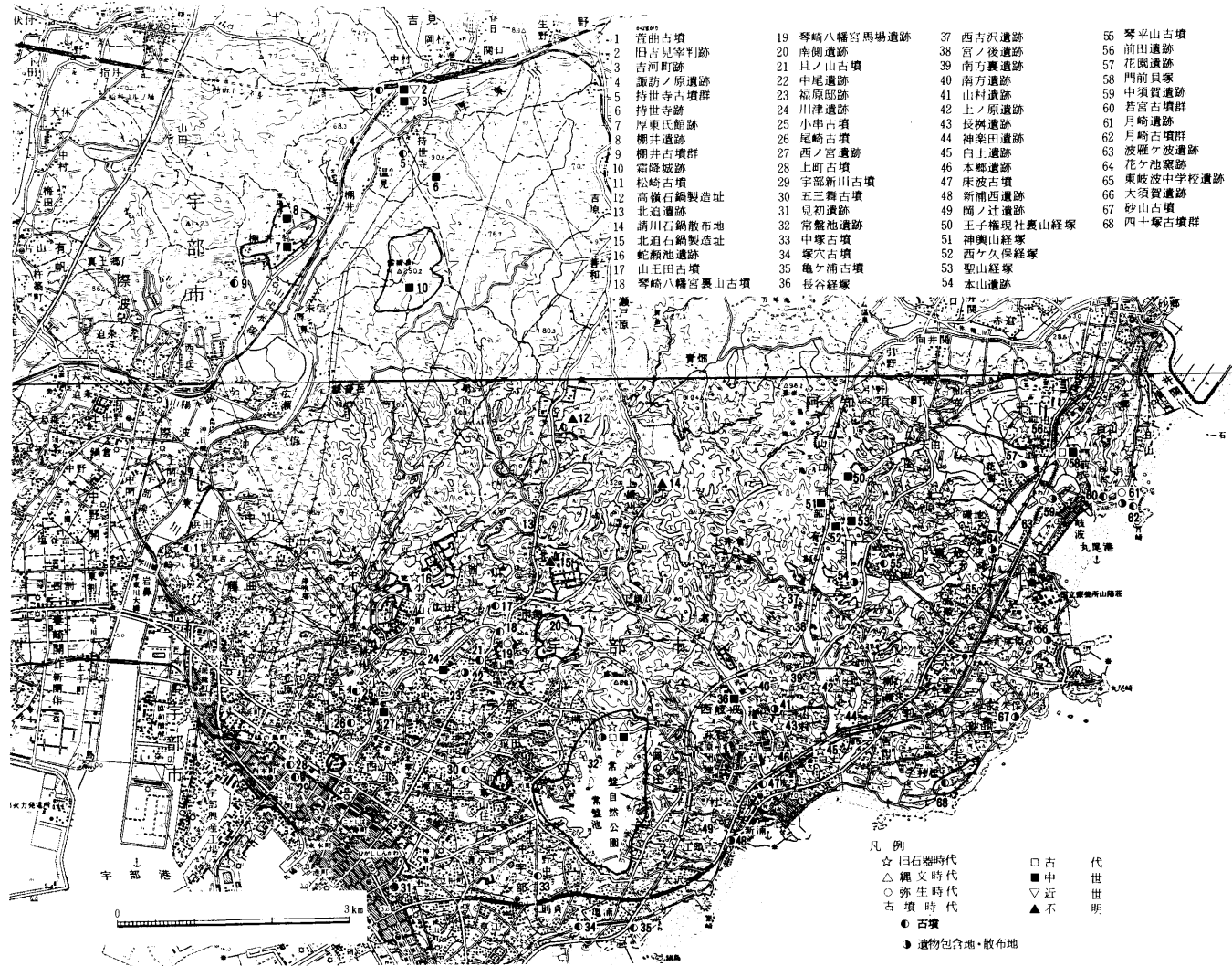


Fig. 3 小串地区周辺地形図および遺跡分布図

細石核などが表採されている。市の中央部では常盤池遺跡から石刃やナイフ形石器等多数の遺物が採集されている。一方、やや西部よりの真締川流域では蛇瀬池遺跡、川津遺跡からわずかに遺物が検出されているのみで、前述の医学部キャンパスにおける旧石器の出土は貴重である。

次に縄文時代の遺跡としては、月崎遺跡や花園遺跡、東岐波中学校遺跡等がある。なかでも月崎遺跡は前期の住居跡や集石遺構、前期から晩期にかけての土器片が多数検出されたことで知られている。遺跡はいずれも市域東端の東岐波海岸周辺の低い砂堆地一帯に立地する。その他では、中央部の常盤池遺跡から早期の押型文土器片や石鏃・石斧などが出土している程度で遺跡数は比較的少ない。

弥生時代の遺跡としては、真締川上流域の小丘陵上に位置する中期後半の北迫遺跡、中流域に位置する前期末の琴崎八幡宮馬場遺跡、中期後半の南側遺跡があげられる。特に北迫遺跡は、貝塚を伴う集落跡として著名である。なお、北迫遺跡と南側遺跡からは石庖丁が出土している。また、東部では中期から後期の月崎遺跡、後期後半から終末の中須賀遺跡等が沿岸の砂堆地に分布している。

古墳時代に入ると遺跡はその数を増し、立地場所も多彩になる。東部では、箱式石棺、壺棺が検出され、弥生時代の形態を残す埋葬遺跡として知られる前期の大須賀遺跡がある。また、波雁ヶ浜北岸沿いには、後期の若宮古墳群や月崎古墳群、後期の製塩遺跡である波雁ヶ浜遺跡が分布する。中部では、工学部キャンパスの南西に後期の五三舞古墳があり、真締川左岸の医学部キャンパス付近には地下式横穴墳といわれる後期の小串古墳、4基の箱式石棺、人骨、鉄刀、刀子が出土した尾崎古墳等が確認されている。西部の厚東川中流域には、後期の萱曲古墳<sup>かなまがら</sup>や持世寺古墳群、下流域には、中期の松崎古墳<sup>6)</sup>等が点在する。松崎古墳は組合式箱式石棺を内部主体とする円墳で、三面の仿製鏡や玉類、武具等、豊富な副葬品が出土している。

律令時代に至ると、宇部市域は長門国厚狭郡に編入され国司の治行下へ入ることとなる。しかし、律令制における農民の負担は大きく、調庸や徭役からのがれるために浮浪・逃亡が増加し、その結果、国家財政の窮乏と口分田の荒廃をまねくこととなった。また人口も増加したため政府は耕地を拡大し財政の立て直しを計った。その対策として、百万町歩開墾計画、三世一身の法、墾田永世私財法が次々と施行されたが、これによって土地公有の原則が否定され律令体制が崩壊しはじめた。厚狭郡では次第に在地豪族の勢力が強まり、厚東・厚狭・吉田の三つの私郡に分割された。その中で頭角を現したのが、物部氏の流れ

## 位置と環境

をくむと伝えられる厚東氏である。厚東氏は現在の厚東区棚井付近を本拠地とし、厚東郡司と称した七代武光の時、霜降城<sup>7)</sup>を構築した。武光は、源平争乱の際の功勞により鎌倉幕府の御家人となり、14代武実の時には長門国の守護に任せられその勢力を九州北部にまで伸ばした。武実は、後に足利氏によって長門国の安国寺とされた東隆寺や浄名寺を創建し仏教擁護を行なった。しかし、1359年(正平14年)、周防大内氏の長門進攻により厚東氏は滅亡し、その大内氏も1551年(天文20年)に滅び、長門国は毛利氏へと引き継がれて行った。

その後、1625年(寛永2年)に周防吉敷から福原元俊が転封されるまで、宇部は一寒村にすぎなかった。しかし1697年(元禄8年)から2カ年をかけ灌漑用水として常盤池が築造され水田開発が進められた。

宇部市域での石炭採掘は、元禄時代以前には始まっていたとされている。当初は、市域の北部を通る山陽道の宿場町で燃料として用いられていた。江戸時代後期になると、干拓事業が進み、瀬戸内海において製塩業が発展した。そのために必要な燃料として石炭が注目され始め、需要が急速にのび、宇部は昭和の初めまで石炭の町として栄えた。

現在の宇部市は地域活性化の一翼をになうテクノポリス計画の中核都市として、新しい街づくりが進められている。(福島)

### [注]

- 1) 山口大学埋蔵文化財資料館『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅱ』(1985年)。
- 2) 山口地学会編「山口の地質をめぐって」(『日曜の地学12』、1980年)。
- 3) 以下、特に明記しない限り下配の資料に依る。  
宇部市教育委員会『宇部の遺跡』(1968年)。  
宇部市史編纂委員会『宇部市史 自然環境・民族方言篇』(1966年)。  
宇部市史編纂委員会『宇部市史 通史篇』(1966年)。  
三坂圭治『山口県の歴史』(山川出版社、1971年)。  
伯野幸次「宇部市」(『山口県の地名』、日本歴史地名大系36、平凡社、1980年)。  
山口県教育委員会『山口県遺跡地図』(1972年)。
- 4) 山口県旧石器文化研究会「宇部台地における旧石器時代遺跡(1)一遺跡群の概要一」(『古代文化』、第35巻12号、1983年)。  
山口県旧石器文化研究会「宇部台地における旧石器時代遺跡(2)一長樹遺跡第1地点 その(1)一」(『古代文化』、第36巻7号、1984年)。  
山口県旧石器文化研究会「宇部台地における旧石器時代遺跡(3)一長樹遺跡第1地点 その(2)一」(『古代文化』、第37巻2号、1985年)。  
山口県旧石器文化研究会「宇部台地における旧石器時代遺跡(4)一長樹遺跡第2地点、神楽田遺跡・吉田遺跡・南方裏遺跡一」(『古代文化』、第37巻8号、1985年)。
- 5) 山口県旧石器文化研究会『長樹遺跡発掘調査概報』(1985年)。
- 6) 宇部市教育委員会『松崎古墳』(1981年)。
- 7) 浄名寺所蔵の家譜・恒石八幡宮旧蔵の系図および妙青寺本の系図による。

宇部（小串構内）医学部浄化槽新築に伴う発掘調査

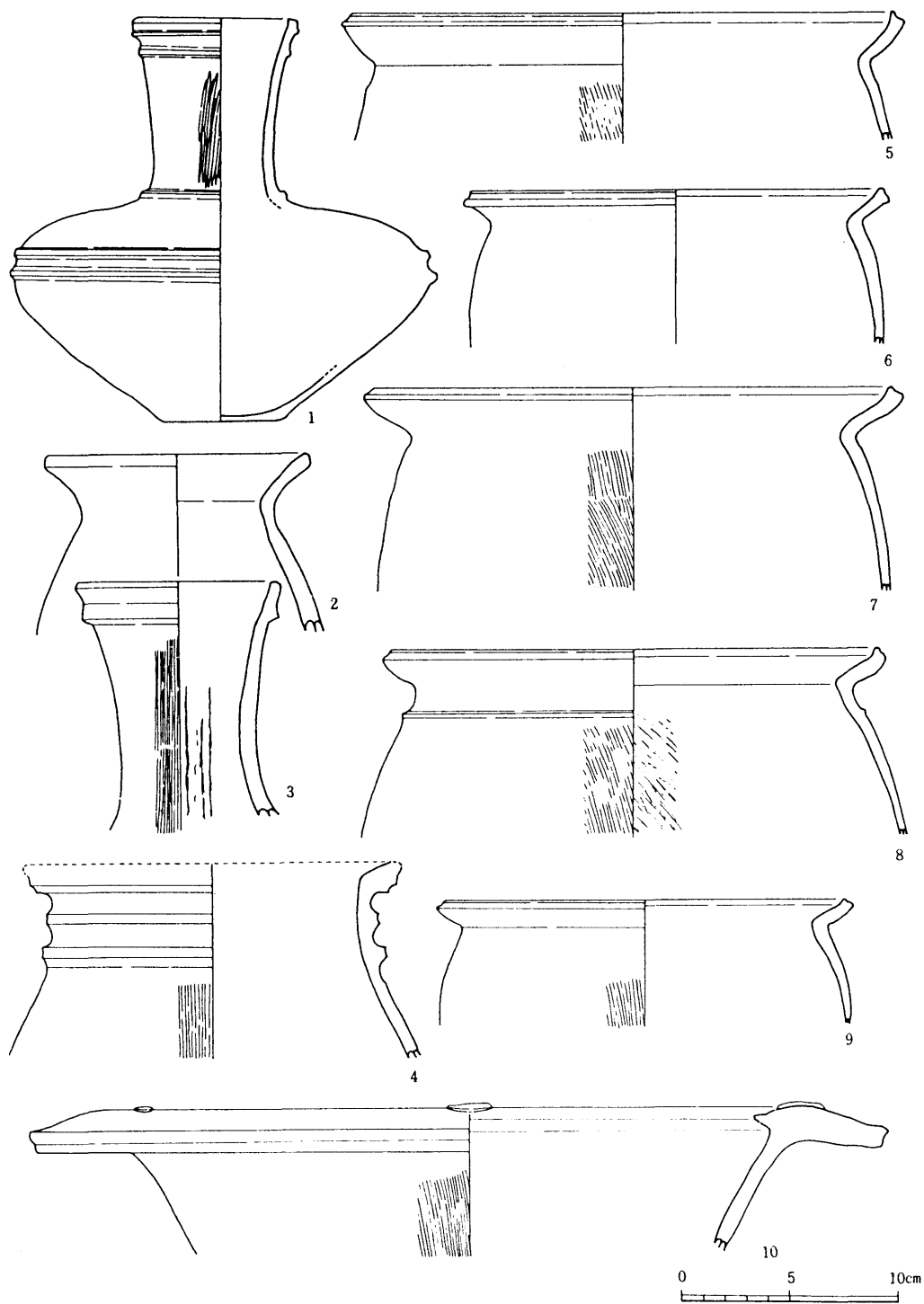


Fig. 4 北迫遺跡第一貝塚出土土器（1962年第1次発掘調査出土，『北迫遺跡遺構確認調査報告』、宇部市教育委員会、1982 より転載）

層 位

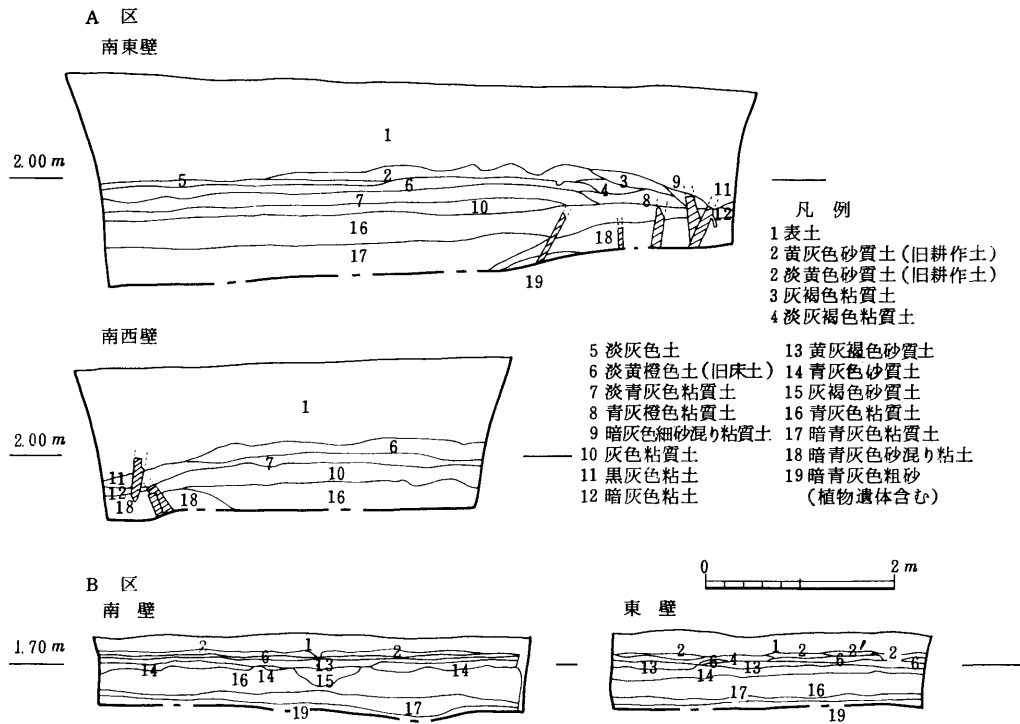


Fig. 5 土層断面図

3 層 位

**A 区** 調査区内で観察した堆積層は16層に分層される。現地表面の起伏は少なく標高約 3.00 mである。第1層は腐蝕土および構内造成時等の置土を含む厚さ約 100 ~ 120 cmの表土。第2・3層は少なくとも二時期にわたる旧耕作土。第4・5層は客土。第6層は旧床土で第7層：淡青灰色粘質土層以下が非人為的な二次堆積層である。第7層上面の標高は、約 1.85 ~ 2.00 m。遺物は約10 ~ 20 cmの厚さをもつ第10層：灰色粘質土層より瓦質土器、国産陶磁器が出土した。

なお、調査区南東隅では上部が削平および攪乱によって消失しているが、少なくとも第7層に打ち込まれた木製杭が検出された。この木製杭以東の堆積層は調査区周辺においてはこの部分にしか認められず、木製杭列によって区画された堰ないしは暗渠等の区画畦畔内の埋土と考えられ、中世から近世にかけてのものと同推察される。

**B 区** 調査区内において観察した堆積層は10層に分層される。現地表面の標高は約 2.00 m

#### 宇部(小串構内)医学部浄化槽新営に伴う発掘調査

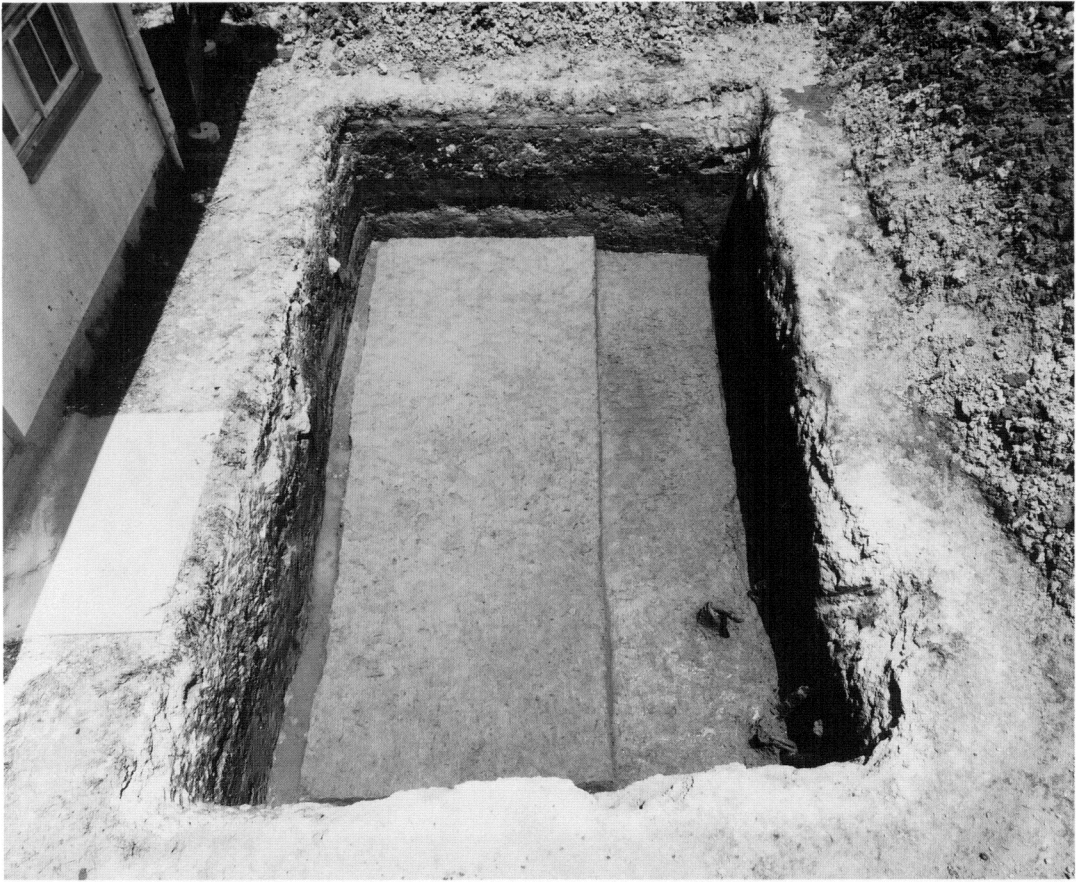
で厚さ約20cmの表土下部にA区同様旧耕作土、床土が認められる。第13層：黄灰褐色砂質土層以下が非人為的な堆積層で上面標高は約1.75mである。遺物は25～35cmの厚さをもつ第16層：青灰色粘質土層から土師器、瓦質土器が出土した。また、第16層を掘り込んで調査区中央部を東一西に貫流する近世以後のものと思われる幅約70cm、深さ約20～30cmの溝1条が検出された。

#### 4 小 結

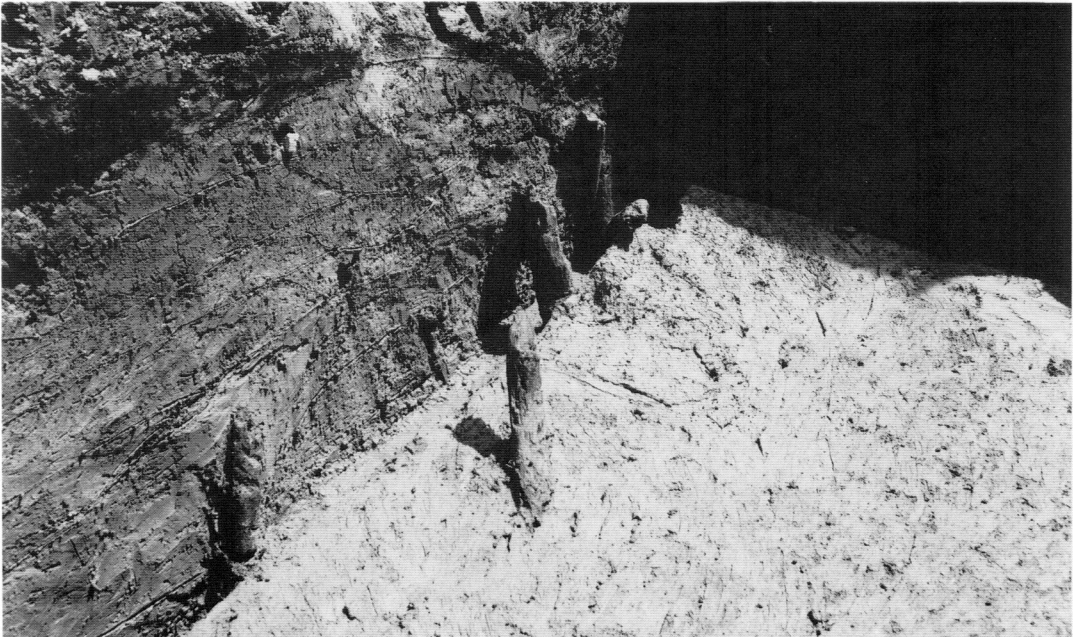
今回の調査は体育館新営計画立案過程において予想されていた体育館周辺地域2ヶ所における浄化槽新営に伴う発掘調査であった。調査面積は2ヶ所あわせて約44㎡と小規模なものであったが、中世を主体とした土師器、瓦質土器、国産陶磁器等が二次堆積層から出土した。また、過去の調査地区のうち大学キャンパスの南側を北東から南西に流れる真締川に最も近接したA区南東隅では中世から近世にかけての木製杭数本が検出された。杭列の方向は不明瞭であるが、周辺地域においては今回はじめて検出されたもので、用排水施設の畦畔に伴う補強用ないしは堰状の遺構と考えられ、中世から近世にかけての土地利用を検討するうえで貴重な資料を提供するものである。

(河 村)





(1) A区全景（南西から）

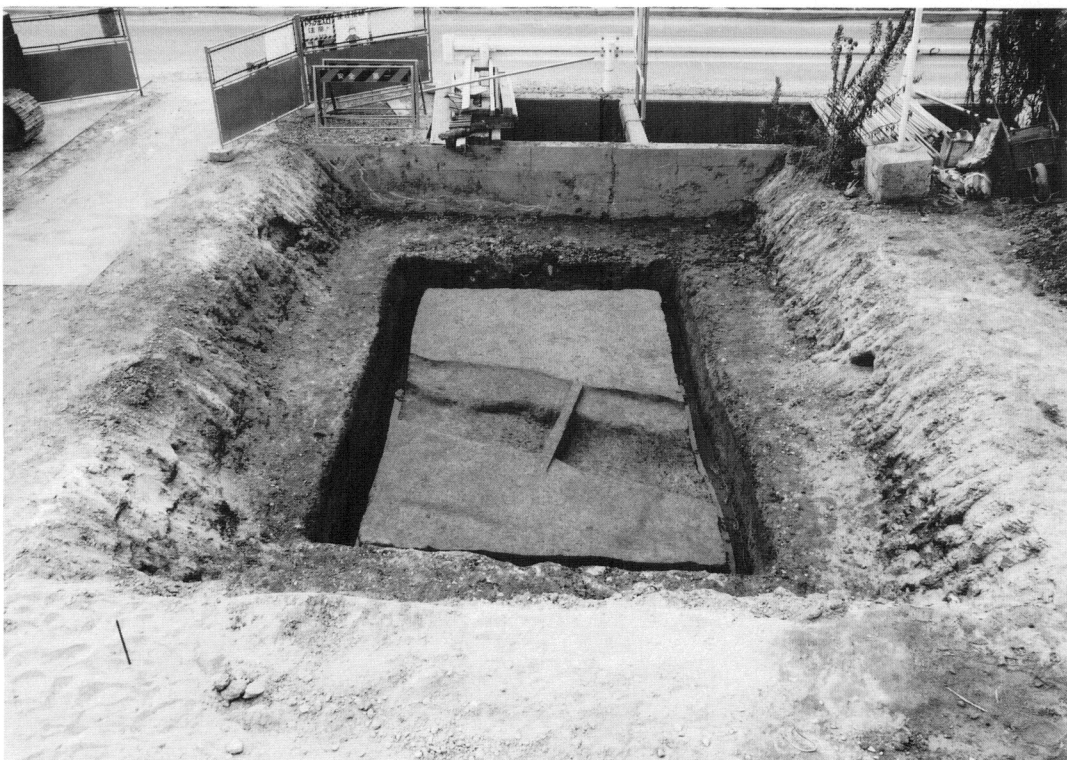


(2) A区南東隅杭列（北から）

宇部（小串構内）医学部浄化槽新宮に伴う発掘調査②



(1) A区南壁土層断面（北から）



(2) B区全景（南東から）